

二 本年生徒卒業後ノ狀況 明治三十一年十二月末調

種別	繪畫科		圖案科	彫刻科	美術工藝科				撰科	合計
	日本 画科	西洋 画科			彫金科	鍛金科	鑄金科	漆工科		
官吏			一						一	
學校教員									一	
自家營業								六	一	
兵役								二		
會社								一		
研究科	二		一					一		
入學								一		
總計	一三		二					七	二九	六

(丙号表 土地表、建物表、乙款 資金、入学金授業、材料、経費、歳入歳出、丁号表 経費表、資金、備品価格表は省略し卷末表中にまとめた。)

解説

1 概況(教育改革)

岡倉校長辭職と連袂辭職があつた後、西洋美術(繪画、彫刻)の教育体制拡充を骨子とする諸改革が急進せられ、明治三十一年七月には新しい教育法が定まり、九月の新学期から実施された。これについて『東京美術学校一覽 從明治三十二年 至明治三十三年』には次のように記されている。

沿革

〔上略〕三十一年三月二十九日高嶺秀夫代リテ校長タリ同年七月授業ノ方法ヲ改正シ日本畫科及彫刻科分期教授ノ制ヲ廢シテ日本畫科ノ實技ヲ

臨摸、寫生、新按ノ三部トシ彫刻科ノ實技ヲ木彫及塑造ノ二部トシテ之レヲ修メシメ又西洋畫科ニ油畫教室一及木炭畫教室ヲ新設シ豫備乙種ニ課スル彫塑ヲ專ラ塑造トシ其繪畫ヲ洋畫ノ素描トシ豫備甲種ノ繪畫ハ日本畫、圖按、及漆工科ニ入ルベキモノニ日本畫ヲ課シ西洋畫科ニ入ルベキモノニ洋畫ノ素描ヲ課スルコト、シ圖按科ニ水彩畫ヲ旁修セシメ鑄金、彫金及鍛金科ニ塑造ヲ併課ス同年十二月二十二日久保田鼎代リテ校長心得ナル〔下略〕

改革は一般の注目するところであり、各紙がこれを取り上げたが、特に『美術評論』の記事は史料的价值があるので、左記に掲載しておく。既述のように同誌の主宰者は無記庵こと大村西崖で、彼は『密教發達史』自叙にも記しているとおり、改革推進の中心人物であつた。したがつて、左の記事は改革の内容をよく伝えているが、多少我田引水の感のある点は注意を要する。

○東京美術學校は、次の學年より教課を改良し、古代各期の風に依り教室を分ちて日本畫及彫刻を教ふることを廢め、彫刻に塑造の教室を設くるなど、改良の主なるものならむといふ。共に喜ぶべきことなり。製作の依頼に應ずることをも、多くは爲さざるべしと聞く。

○和歌山縣下の古社寺寶物の破損は、岡倉前美術學校長の斡旋にて、同校卒業生中の一部の人が修繕に従事すべしといふ。

(『美術評論』第十二号。明治三十一年六月)

時事

○東京美術學校にては、去る五月中、製作掛を廢し、一時依頼製作の事

業を引受くることを廢め、從來の殘工事に關する事務は、會計掛に於いて扱ひ居れり。

○東京美術學校は、七月十日、新卒業生に證書を授く。卒業生の科別人名左の如し。

日本畫科

山崎勇馬 三浦二郎 岡村道三 大平正曹 山縣丹治 齋藤新助 飯

尾駒太郎 松平乘長 大石榮雄 高橋玄道 藤原美治郎 清家 恕

杉村仙吉

圖案科

井上 清 川上爲之助

彫刻科

野口藤三郎 木澤 禎

彫金科

蘆澤鴻次

鑄金科

鈴木 一 阪口 朧

漆工科

<sup>〔詩〕</sup>  
藤田 實 兒島 明

撰 科

狩野誠信 河津祐信（以上日本畫）

白瀧幾之助 湯淺一郎 小林萬吾 北 <sup>〔蓮藏〕</sup>連造 丹羽林平（以上西洋

畫）

○同校新四年生三十五人は、教授今泉雄作、助教田中後治二氏の指導にて、七月二十日出發、二週間京都奈良に修學旅行す。

○洋畫家淺井忠、彫塑家長沼守敬の二氏は、新に東京美術學校教授に任

せられ、彫塑家藤田文藏氏もまた囑托教員となれり。同校囑托教員久米桂一郎氏もまた教授に任ぜらるべしといふ。

雜 錄

雜 感

無 記 菴

<sup>〔潮〕</sup>湖 音 軒

晚 香 園

無 記 菴

○東京美術學校が校長の更迭ありてより以來、教育法の改善といひ、教員の淘汰といひ、校紀の振肅といひ、種々釐革しつゝあるといふことは、屢余輩の耳にする所なるが、中に就いても西洋畫科に淺井忠氏を擧げて、黒田氏と共に教授の任に當らしめ、彫刻に長沼、藤田の二氏を擧げ、西洋の手法によりて塑造を授けしむるなど、其他從來の日本繪畫科及彫刻科に、一期二期三期などといふあやしき期分けあるを廢したるが如きは、先づ緊要なる改革といふべし。余輩は美術教育の改良が敢てこれにて竭きたりとは云はず、爾後改良すべきふし多かるべきも、如上の改革が、孰れも其正鵠を得たるを喜び、これを岡倉時代の教育法に比すれば、優に一段の進境に向ひしものといふべくして、美術學校生徒は是より漸く正路に向つて進歩することを得んか。

○近時美術學校卒業生は、精藝會といふ一團體を組織し、世の需要に應じて製作事業をなすといふに就いて、同じ目的を以て現れたる、元の美術學校罷免者連の會合なる美術院が、これに對して大に警戒を加ふとか、互に反目の有様なりとか、種々なる風評を傳ふるものあり。こは今の美術學校に反對なりと稱せる美術院のことにしあれば、隨ひて其美術學校より出でし卒業生の團體と相容れざるは、自らなる勢なるべし。志かはあれども、余輩は兩者に望むことあり。堂々たる主義上の争ひな

ど、所謂君子の争ひは、素よりやるべし。たゞ降らぬ感情の上の争や、將た敵敵の争ひなどは、世の識者の笑を招くに過ぎざれば、諸氏これを慎みて可なり。又望む。何事に限らず競争は凡て進歩の基にして、斯く相對者の起るは、必竟斯道の發達を促す所以なれば、兩者共に健全なる發達を遂げて、益々斯道の進歩を計らむことを。

○美術學校教育法の改良は、晚香君も少しく述べられたるが、更に精くこれを述べむに、西洋畫科に淺井忠氏を入れて一教室を擔任せしむるとともに、從來日本畫、西洋畫、圖案、蒔繪の四科に入るべき豫備科（甲種）の生徒には、たゞ日本畫のみを課したりしを改めて、その中、洋畫志望の生徒には、始めより洋式の木炭畫を習はしめて、専門の素養を與へ、これとともに洋畫科一年の木炭畫をば久米桂一郎氏をして木炭畫教室に在りてこれを教へしむることとし、圖案科中、建築裝飾を主とする生徒に課する繪畫も、從來日本畫のみなりしを改めて、半ば洋式の水彩畫を課し、得意の淺井氏をしてこれを授けしむることとしたるは、洋畫に關する改良の重なるものなり。また日本畫科と彫刻科とは、從來、上古、中古、近世の三時代の様式を基として教室を分ち、おのづから様式因襲の弊を生徒に與ふる傾きあるを廢し、日本畫科には、臨畫、寫生、新作の三教室を置きて、生徒をして一週間づゝ交替してこれに入らしめ、臨畫は多く古作の粗畫を粉本とし、主として暴紙に臨習せしめて、以て骨法用筆の修養を重んじ、從來、膠紙、柳炭を濫用して、揮洒自在の腕力を萎靡せしめたる弊を去り、また日本畫第一の缺典にして、從來名のみありて行はれざりし寫生を重んじ、始終實物を捉へて、その大體を主として所謂「ちどり」を練習せしめ、以て應物象形、隨類傳彩の能事を得せしめむことを期し、新作の教室に於いては、専ら自由の製作に従事せしむることとなりたり。彫刻科に至りては、更に大にその面

目を改め、從來分期三教室に於いて木彫のみを株守し、絶えて寫生をなすことなく、たゞ古式と師風との摸倣に局したりしを以て、その實習時間の一半を以て、塑造に依りて寫生を教ふることとし、而もその塑造をば鑄金科、鍛金科、彫金科の生徒にもまたこれを課し、以て造形の技術を修得せしむることとなりたり。加之、立體造形術の各本科に入るべき豫備科（乙種）の生徒に課する繪畫は、從來たゞ日本繪畫のみなりしを改めて、これには殊に立體の凹凸をも寫し出し得る木炭畫を教ふることとし、次に彫金、鍛金の二科は、初めより別設せられて、從來毫も兩技の聯合を許さざりしが故に、鑄技を假らずして金屬を以て立體造形を成すには、一も兩技の合用に依らざるべからざる理に乖くを以て、改めて兩科の生徒をして、互に他の一科の技を旁修せしむることとなし、以てこれを備はらしめたり。これ等は實に同校改良の主なるものにして、一々みな當該教員の合議を経てこれを決し、來學年より實行する定めなりといふ。吾人は、この改良に依りて生ずべき結果を見ることの、一日も早からむことを冀ふものなり。

この改良は晚香君もいへるが如く、固よりいまだ盡せるにあらず。されどこれを彼の偏狹の國粹と、時代の様式とを以て所謂理想的のものを作ることのみを獎勵したりし時の學校に比ぶれば、その方法の正義に合へること、既に同日の談にあらず。これを第一着手として、益々美術教育の正鵠を得ば、斯藝發達の前途に於いて、その利量るべからざるものあらむ。吾人は、彼の紛擾以來の美術學校が程なくして平靜に歸し、銳意、舊弊を打破して、この改良を行ふことを嘉し、更にこれに満足せずして、着々諸般の缺點を補ひ、以ていよいよ完全に近からしめむことを望むものなり。

○私立美術院が製作の事業を營みて、青年作者の技術練習の資となさむ

とするは、甚善し。されどその教育部に流派的的精神あることは、吾人の最も不同意なるところなり。況やそが若しも例の所謂理想派に傾かば、更に善からぬことなり。そもく流派といふものは既に一の癖にして、作者個人が自然より得來るところに外ならず。自然には流派あることなく、また癖あることなし。美術の教育は、無垢純淨の自然を藍本として、その美を攝取する練習をなさしむるより外ならず。これ即ち美術教育の眞諦なり、無上義なり。かくても流派はその作者の個人性よりおのづからにして生じ來るの己むを得ざるものなり。若し始めより教育に流派的的精神あらば、癖上癖を重ねしむる邪道の教義のみ、鬼窟裏の活計のみ。こゝを以て美術教育の正鵠は、寫生を以て旨歸となす。會せざるものは、寫生を主とするを以てまた一の流派的教方法と誤るものあれど、そは自然に流派なきを知らざるが故のみ。吾人は美術院教育部の教育法の如何を見て、更に論ずるところあらむとす。

○流派的教方法は、色眼鏡を以て自然を觀せしむるなり。これに依りて教へられむものは、一種の色盲に近からむのみ。自然に眺めては、何の得るところも無かるべし。

○流派心の打破は、今の美術界を救ふべき最要の一法なり。

○諸流派并具を以て、美術學校教員組織の極致と思ふ輩あり。これ美術教育の本義を知らざる者のみ。流派の癖の最も少き人を得るを以て、最も教育に利ありとす。また己が風を教ふるを以て教員たる能事と思ふ輩あり。其非なる所以は前に同じ。善く自然の對望因果を寫すことを教ふるを最も益ありとす。

(無記 菴)

(同第十三号。明治三十一年八月)

## 時事

○洋畫家久米桂一郎氏は、木炭畫教授擔任の爲、東京美術學校教授に聘せられ、教育家尺秀三郎氏もまた東京美術學校教授に任ぜられ、幹事の職に就きたり、土佐派の老畫師山名貫義氏もまた同校教授に任ぜられ、日本畫の授業を受持つこととなりたり。また和洋畫家小坂象堂氏も同校助教授に任ぜられ、淺井忠氏の油繪教室の授業を助くることとなりといふ。共に八月中の事なり。

○同校の塑造教室、油繪第二教室、(淺井忠氏受持)木炭畫教室(久米氏受持)等、みな九月中旬より授業を開始す。彫刻の上に「モデル」を用ゐて寫生することは、同校に於いて、今回この改良を以て嚆矢とす。

○同校四年生の修學旅行は、今開始してその成績を徴したる爲、生徒はみな熱心に材料を蒐集し、或は刷寫し或は縮圖し、或は詳細目錄を製し、或は紀行を綴り、或は報告を作り、それく少からぬ良成績を齎らし歸れりといふ。

(同第十四号。明治三十一年十月三日)

## 時事

○理科大學助手白馬會員長原孝太郎氏は、去る十月四日東京美術學校助教授に兼任せられ、久米氏の木炭畫教室の授業を助くることとなり。

○東京美術學校日本畫科は、教授の方法を改め、臨畫、寫生、新作の三教室とし、生徒一組ごとに毎週交替してこれに入ることとなり。また彫刻科も塑造教室を設けしより、教員生徒とも熱心に勉強し、ゆくゆく甚だ望みあり。その他すべての規律、従前に比すれば大に面目を改めたりといふ。

(同第十五号。明治三十一年十月二十七日)

生マテ實施致度此段仰高裁候也

明治三十一年七月十五日

東京美術學校長 高嶺秀夫 印

2 制服改正

明治三十一年七月、岡倉校長時代の終焉を象徴する制服改正が行われ、生徒は他の官立学校生徒と同様の学生服を着用することになり、教官の制服は廃止された。尤も、制服着用の規則は既に西洋画科開設の時点から有名無実となっていた(333頁『毎日新聞』記事)。

庶第七三號

今般本校職員生徒從來ノ制服制帽ヲ廃シ教員ハ別ニ服制ヲ定メスシテ唯々蠅結ノ徽章ヲ佩用スル事トシ生徒ノ制服ハ別紙ノ通り改定シ儀式ノ時ニハ必ス之ヲ着用シ平常ハ随意トシテ來學年始ニ於テ初年生ヨリ第二年

追テ第三年第四年生ニ在テハ卒業期マテノ年数永カラサルヲ以テ制服ノ新調ハ之ヲ強フルヲ止メテ各自ノ随意トシ單ニ制帽ノミ新調セシムル見込ニ候  
尚右ハ準備ノ都合モ有之候ニ付可相成至急御裁可相成候様致度此段特ニ申添候也

(別紙)

名稱	地質	徽	章	眠底	頤	紐	製式	形状
帽	黒絨	打出シ美ノ字形金色電氣メッキ製 長サ八分 巾八分五厘		革 裏表 白黒	黒革巾 二分五厘 櫻花形金色電氣メッキ製		下部高サ 一寸二分 (夏期ハ白ノ日覆ヲ附ス)	如圖
衣	紺へル		円釦内ニ美ノ字ヲ打出シタル 金色電氣メッキ 大サ経六分 胸部ニ五箇ヲ附ス 袖釦ハ右ト同形状ニテ左右各々ニ二箇ヲ附ス 大サ経四分			襟巾 一寸二分 袖長サ腕関節ニ止マル 長サ臍骨上端ヨリ下ルコト凡ソ四寸五分 物入前面左右並ニ左胸部ノ表面ニ各一箇ヲ附ス		如図

名稱	地質	製式	形状
袴	紺へル	長サ靴踵ノ上際ニ止マル 大サ寛闊 物入兩股ニ各一個ヲ附ス	如 図

〔自明治四十四年一月教務内規、諸規定書類「教務掛」より。別紙の図は欠損〕  
至

### 3 学術実地指導

『読売新聞』(明治三十一年七月十八日)には次のように記されている。

○美術學校生徒の旅

美術學校四年級の生徒一同ハ卒業製作の参考として半官費旅行を許され  
二週間我國美術の淵源たりし京都奈良を巡覽する都合にて教師一名附添  
ひ去る十五日出發したり、但し學校よりハ一名につき六圓つゝ支給する  
とぞ

### 4 美術學校騒動と生徒

明治三十一年の退学者数は計四十一名で、例年になく多い。退学の中には病氣退学、除名退学も含まれるが、本年の場合、岡倉校長の辞職および教官の連袂辞職と関係のある退学が多かつたようである。特に日本画科(第一年(研究科)では二十五名の多数にのぼっている。

### 関連事項

#### ① 学校參觀記

#### ◎美術學校 桂 陵 生

啓上、昨日一寸美術學校參觀仕候、上野の山の一角に動物園と圖書館との御隣に位し候が、乃ち極東美術帝國の其又本家本元たる美術學校に御座候。されど其の建物の頗る古びて其處此處壁の剝げ落ちたるなど、天平時代の壁模様と申さばそれまでなれど、一國美術の兎も角も本家としては少しく如何と存ぜられ候。

案内せらるゝまゝについて参り候處、最初は豫科の繪畫教室のよしにて、衣桁様のものに古畫をブラ下げて廿名程の生徒頻りに臨摸致し居り候、中には横幅の布き寫しをなして居り候ものも有之候ひき。此の教室の受持教師は西郷孤月、菱田春草の二氏のよし、小生の参り候時は生憎御出で遊ばされず、生徒の多數も火鉢を圍みて何か雑話に耽り居られ候。夫より二階へ参り候處、此處は繪畫本科三教室のよし、川端玉章氏室の一角に端座して何か揮毫致し居られ、七八名の生徒は或は筆を走らすもあり、或は繪の具を解けるもあり、豫科よりはズット高尚な處をやり居られ候。室は長方形の西洋室へ疊を敷きて半ば日本風に致し、中央に一段低く通路を開き候ものに御座候。小生はじめは畜の廊下にて兩端に列ねられ候畫は單に陳列せられたるまでと存じ候ひしに、其處